広島工業大学紀要研究編
第47巻（2013）179-188
翻　　訳

夜の果てに（2）

フリード・ランペ著
松川　弘*・訳

（平成24年9月27日受付）

Am Rande der Nacht (2)

von
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 27, 2012)

「**母さん，見てよ。この子ったら，**寝間着のままで窓際にいるわよ。風邪を引いても知らないから。」ルイーゼの姉が言った。ルイーゼはすこし眠り込んでしまっていたのだ。彼女は，腕を窓の下枠に置き，頭をその腕の上にもたせかけていた。

「何をしてるんだい，お前？」母は彼女を抱き起こし，そっとベッドに入れた。

「いつの間にか，眠り込んじゃったみたい」と，ルイーゼは言ってあくびをした。「初めのうちはまだヘニッケ氏さんの声が聞こえてたわ。それから眠り込んだのね。」ルイーゼは少しずつ目が覚めてきた。そして心地よさそうにベッドの中で伸びをした。

「お祈りをしてからまた寝なさい。」母親と姉はベッドの前後に立った。母親は習慣通りに両手を体の前で組み合わせたが，アンニの方は，両手をベッドの縁に置いたままにしていた。ルイーゼはそれを見とがめた。

「アンニったら，両手を組み合わせてないよ」と，ルイーゼは勝ち誇ったように言った。

だが，アンニは別に腹を立てなかった。「それがあなたに何の関係があるの。両手を組み合わせてるかどうかは，問題じゃないわ。」彼女は，きまり悪そうに少しだけ両手を重ね合わせた。

「ちゃんと組み合わせてない」と，ルイーゼは言い張った。

「さあ，始めるわよ。ぐずぐず言わずに…」母親はもう目を閉じていた。お祈りのとき，彼女はいつもそうするのだった。

ルイーゼは聖書の文句を退屈そうに唱えはじめた。投げやりで機械的な唱え方だった。アンニは，自分が空騒ぎを見抜けないような愚かな女だと思いたくなかった。今日もハンスとお祈りのことで話し合い，ルイーゼはもうちゃんとお祈りをするような年じゃないということで意見が一致したではないか？

ルイーゼは急にお祈りを中断し，掛け布団の中で忍び笑いをした。

「お祈りしているのになぜ笑うんだい？」母親は，悲しげ顔になった。

「だって，アンニが変なことをしてるからよ。」

アンニは緊張した面持ちで，窓の外を凝視していた。今度は，彼女も笑わざるを得なかった。腹を立ててはいたが，笑わざるを得なかった。

「母さん，もうやめて。ひとりで続けてよ。その間，隣の部屋に行ってるから。」彼女はルイーゼの気持ちがよく理解できた。この年ではもう子供たちとお祈りなんかできないことに，母さんは気づいていない。母さんは，いつだって彼女と一緒にお祈りしようとする。彼女が笑い出すまで…。

母親は，今日はもうルイーゼと一緒に祈る気がしなくなった。「厳粛さが台なしだよ」と，彼女は言った。彼女の暗い目には，深刻な悲しみが浮かんでいた。「そう言えば，今日はキスしてあげてなかったね」と，彼女は言って，

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

ベッドの上に身をかがめた。ルイーゼは彼女に激しく抱きつき，頬を母親の頭に押しつけた。

「母さん」と，彼女はささやいた。「私，お祈りするわ。でも，小声でね。今からもう一度，小声で唱えていいかしら？　私ひとりで？　きっとするわ。」

母親はアンニと一緒にテーブルについたとき，「あの子は私の心配の種よ」と言った。

「あの子は成長したのよ。それだけのことよ。」

ルイーゼはうれしくなり，気が楽になった。彼女は，母親に自分の本心が言えたことがうれしかったのだ。彼女は体を伸ばし，首のところまで掛け布団を引っ張りあげた。外から，ひそひそ声が響いてきた。ヘニッケ氏のあずまやで，誰かが話し合っていた。運送屋の馬がときどき鼻を鳴らし，またあのきれいな音楽が鳴り始めた。ベルク氏は夕食をすませ，ヤコービ夫人が片づけ，部屋がまた暗くなった。するとベルク氏は立ち上がって，演奏を再開したのだ。隣の部屋では，母親とアンニが話し合っていた。ドアがわずかに開いたままだったので，ルイーゼは，話し声を聞き取り，灯火を目にすることができた。

「彼は行きたくないのに，出かけなければならないのよ」と，アンニは言った。「そんな気晴らしなんて，ゲオルクには何の足しにもならないわ。」

「それはそれでとても健全なことだと思うけど」と，母親は言った。「図画の教師という彼の立場上，やむを得ないでしょう。」

「私がひどく不安だってことが，母さんには分からないの？　彼はいつも酔っ払うか，ほろ酔い気分で家に帰ってくるのよ。私はそれがいやなの。彼は出かけるときに，九柱戯のあとで一杯やるかも知れないからねって，言い残して出るの。仲間が飲むんだったら，自分も飲まないわけにはいかない。ふだんはほとんどアルコール類を飲まないし，その方がいいってことは分かってる。でも，君だって，僕がちょっと変だとみんなに思われたくはないだろう。私はもちろん怒ったわ。それで言ってやったの。あなたの言うこと，私には全然理解できないわ。絶対に…」

母親はほほえんで言った。「それはよくあることですよ。」

ルイーゼはその間にまた眠り込んでしまった。ヘニッケ氏と税関吏は相変わらず話し込んでいる。ベルク氏はバッハを演奏しているし，アンニはもう家に帰らねばと思った。彼女は短く刈りあげた黒髪に小さな帽子をかぶると，母親に軽くキスした。彼女の黒い瞳は曇っているように見えた。「本当にちょっと心配なの。」 母親は元気づけるように彼女の肩をたたいた。「まあまあ。そんなにくよくよしないで。」

「今まで，すべてが理想的だったのに。」「あなたたちはまだほんの数カ月前に結婚したばかりじゃないの…」アンニは出て行った。彼女は通りをゆっくり家の方に歩いていった。彼女はすぐ寝ようと思った。一人じゃそうするよりほか仕方がない。

確かに，時がたつのは，ある者には遅すぎ，またある者には早すぎた。しかし，実は，時は，早くも遅くもなく，規則正しく，冷酷に，絶え間なく，庭を越えて響くベルク氏のフルートの調べのように力強く，規則的に，起伏はあるが確固たる均整を保ちながら進んでいった。そしてこうした時の経過，流れるようなその進行は，喜ばしげでも悲しげでもなく，ただ単にそこにある不可解な存在であった。結局，時間は進行し，すべてを動かし，またすべてが時間のなかで動いていた。時は，水や木々，風，血，心臓の鼓動のなかで動き，流れ，押し寄せていた。時間は絶え間なく闇から押し寄せ，また闇のなかに押し戻された。昼が流れ込み，夜が，数え切れないくらい多くの夜のうちのひとつの夜が始まった。そしてその夜が再来することは決してないだろう。同じ運命のめぐり合わせが生じることは二度とないだろう。夢のなかでも目覚めていても時を生きぬ者は，永久に時をなおざりにし，彼の生は知らぬ間に少しずつ貧しいものになっていった。昼が過ぎ去り，夜が始まった。満ち足りた暖かい九月の一夜が，いまや厳然と存在していた。夜は，広々と重々しく流れていった。夜は，通りや庭を満たし，木々や茂みに巣食い，その生温かい腕で木の葉のかたまりをかき乱し，草花の刺すような香りを通りにまき散らした。夜は，建物や池，溝に沈み，港や川に垂れ込め，橋のアーチの下に凝縮した。橋脚のあたりを川水が重苦しく流れ過ぎた。そして，町は夜を少しでも押しのけようとした。ランプやアーク灯，音楽やおしゃべりで。しかし，夜ははるかに強力だった。夜はすべてのものを満たし，内包し，次第に濃くなる闇の中に沈めた。夜はしなやかに流動する背景で，そこではすべてが安らい，すべてがその中にふたたび沈んでいった。夜は，手足の筋肉をゆるめ，疲労させ，満足させた。多くの者がすでに眠っていた。ルイーゼもすでに眠っていた。死の床にある病人も眠り，彼の妻は暗い部屋の彼のかたわらにすわって，次第に弱まる彼の呼吸に聞き耳をたてていた。「航海」館の船長の未亡人たちも，一人また一人と明かりを消し，床についた。彼女たちは日中もすでにもはや目覚めてはおらず，今やより深い眠りに落ち，夢から夢に沈んでいった。そして，暗い部屋の彼女たちのたんすの上には，もう長い間海の底で安らっている夫の形見の珊瑚細工や大きな貝殻が置かれていた。だが，夜になってようやく生気を取り戻した者たちも多かった。女たちは港通りを歩き，あたりを見回していた。彼女たちはウインクしたり呼びかけたりした。ランプの下や色とりどりの広告柱のそばで，彼女たちは

立っていた。大きなアーク灯が白や薄紫色の光を放っていた。ビアホールは客であふれ，ドアが開くたびに提灯が揺れて，電気ピアノが貧弱なかん高い音を立てていた。固いソファーのプラッシュの上に恋人たちがすわり，手を相手の体に回しながら微笑みを交わしていた。アストリア館の切符売り場には，多くの男女が詰めかけていた。門のアーチを抜けて，彼らはフロアに入っていった。そこで彼らはテーブルにつくと，ビアグラスを前に，葉巻をくわえて，開演を待っていた。給仕が駆けずり回り，赤い制服を身につけ帽子を斜めにかぶった青白い童顔のほっそりしたボーイが，煙草やチョコレートを差し出していた。座席の周囲にはベランダがしつらえられていて，そこにも人々がすわっていた。テーブルを並べたフロアの真ん中に，高いダンスフロアが組まれていた。脇にある周囲を緑の葉でおおったあずまやには，ジャズバンドが着席していた。彼らが勇ましいマーチを演奏すると，レスラーたちが大股で背後から登場してきた。彼らのたくましい四肢は，ランプの光の下で輝いていた。彼らはテーブルの間を通り抜けて，舞台に上った。その上で彼らは一列に並び，司会者が，これから対戦することになっている彼らの名前を読み上げた。呼び出されたレスラーは前に進み出ると，腕を差し上げながらお辞儀した。バンドがファンファーレを演奏した。観客は一方にたいして拍手し，もう一方をやじるか，あるいは無視していた。多くの観客たちが，期待に胸を弾ませながらプログラムに見入っていた。レスリングの間には，バリエテのナンバーとダンスがその大きなフロアで催されることになっていた。そしてそれらが終わると，上の階の閉ざされた室内でまだ続きが用意されていた。カバレットとバー，それにダンス。人々はすでに満足し，ゆったりと椅子にもたれかかり，ビールをしたたかに飲み，煙草をふかし，かわいい娘をちょっとでも近づけようとしていた。多くの船乗りや港湾労働者が入ってきていた。また，そこここに中国人や黒人も見かけられた。彼らはこの下の港で黒々とした船体を憩わせている船を離れてやってきたのだった。アデライーデ号だけが明るく照らし出されていて，乗組員たちは荷を積み込むのに余念がなかった。船長は，時々船橋に出て，大きなクレーンが音を立てながらぎっしり詰まった貨物を船内に降ろしている様子を見守っていた。エーリヒとハンスは，巻き上げられたともづなの上に腰をおろして，船を子細に観察していた。ある明るい船室が見えた。そこでは二人の若者がトランクの中身を出して，まるで自分の家にいるように気楽に振る舞っていた。彼らは，これからロッテルダムに向かおうとしている学生のオスカルとアントーンだった。エーリヒとハンスは，うらやましげに彼らの静かな動きに見入っていた。

一隻の白い遊覧汽船がかすかな音を立てながら港に入ってきた。船の明かりが水面に反映してきらきら光っていた。船は埠頭に横づけされ，橋が渡された。人々が下船してきた。ベルタは，顔面を蒼白にして黙ってカールと並んで立っていた。彼女の瞳は奇妙に輝いていた。航海士は橋のかたわらに立って乗船券を検札していた。ベルタはカールを先に行かせた。航海士が彼女の耳許でささやいた。「アストリア館に行っててくれ。レスリングとダンスがあるんだ。僕もすぐ行くから。」ベルタは彼の方を見ずに歩いていった。だが，彼女はかすかにうなずいていた。

遊覧汽船でやって来た人々はアデライーデ号のそばを通り過ぎ，港通りに入り，アストリア館やレストラン，映画館の前を通っていった。幾人かがそこで曲がってアストリア館に入ったが，他の人々はゆっくり帰宅の途についていた。長旅の幾人かは港の入口ですぐ市電に乗った。一番線の電車がそこで彼らを待っていたのだ。市電は港通りを走った。通りの片側は明るく活気があった。そこにはレストランが立ち並んでいた。だが，もう一方の深紅色の大きな税関の建物は静まり返っていた。窓ほどれも真っ暗だった。税関吏は今，ヘニッケ氏のあずまやにすわって友人とのんびり会話を交わし，ベルク氏のフルートの演奏にときおり耳を傾けていた。ベルク氏がまた演奏を始めたのだ。市電はさらに走り続け，鉄道橋の下を通り抜けた。橋の下のソーセージの屋台を，人々が相変わらずびっしり取り巻いていた。鍋から湯気が立ちのぼり，人々は赤い胡椒の利いたソーセージをがつがつ頬張っていた。それから市電は土手のそばを通り過ぎた。恋人たちが堀端のベンチに腰をおろして，抱き合ったまま無言で，漆黒の平らな水面を見つめていた。夜の闇を通して白鳥たちの羽根が白い官能的な光を放っていた。他の恋人たちは茂みや木の下で絡み合い忍び笑いしていた。丘の上の栗の古木の間に，製粉工場が大空高くそびえ立っていた。一階に明かりがともっていた。公園管理人はしばらく前に帰宅していた。彼の巡回は終わり，ぼろぼろの小舟が岸につながれていた。彼はそれを足の爪先で岸に引き寄せ，チェーンを針で草のはえた岸の斜面に固定していた。管理人の先のとがった麦わら帽子は部屋の帽子掛けに引っかけてあった。老人はランプの下にすわって新聞を読んでいた。壁にはさまざまな光彩を放つアヒルや白鳥の剥製がかけてあった。これらは彼のお気に入りの鳥たちであった。鳥たちは，生きているものも死んだものも，彼に残されたただ一つのものだった。彼の妻は亡くなっており，娘は家から追い出されていた。彼女は今，港通りに小さな部屋を借りて，毎晩そこらを駆けずり回っていた。今晩も，彼女は色鮮やかな広告柱のそばに立っていた。ペーターが何度も自分のそばを行ったり来たりするのを見た彼女は，彼に声をかけた。

「あなた，一体どうなさったの？」彼女は彼のそばに歩み

寄ると，彼と腕を組んで一緒に歩き出した。

ペーターは身をもぎ離そうとした。「いや，僕は…」

「そんなに照れないでよ。」

「こんな経験は初めてなんだ」と，彼は小声で言った。

「いい機会よ，あなた何歳？」

「二八歳さ。」

「あらまあ，それでまだ童貞なの？」

ペーターはうなずいた。彼は気後れしていた。自分がずっと前から望み，恐れてもいたことを今，実際に経験しているのだ。一人の女性が自分の腕にぶら下がり，万事がうまく運んでいく。自分も最後には思い知ることになるだろう。彼女の素姓を知ることになるだろう。こんな馬鹿げたことをしなければよかった。彼女は自分を笑いものにするだろう。馬鹿にするだろう。それも当然だ。

彼女は一瞬立ちどまり，腹をよじって笑い出した。「それじゃ，私はとびっきりの上物を釣り上げたってわけね。まったく未経験の，何も知らない小僧っ子を。」

ペーターは突然身をもぎ離し，つらそうに彼女を見つめた。「やっぱりやめにしよう。今日はだめだ。君の思うつぼにははまらないよ。」

彼女は彼の人のよさそうな丸顔を見つめた。彼の黒い瞳は怒りに燃え，悲しげで，口許がピクピク動いていた。その表情には冷たさや無神経さは認められず，感情がこもっていた。彼はまったく一途だった。彼の表情は少し滑稽だったが，彼女は興奮した。

「それじゃ私がいやなのね。」彼女は突然まるで幼い少女のように彼の前に立った。彼女は孤独で，保護を必要としていた。彼女は荒々しさに身を委ねていた。たった今まで生意気そうだった彼女の目は，がっかりしたように下を向いていた。とがって上向きに反った鼻が，彼女の悲しみに不思議にマッチしていた。そして，彼女がやせた体にまとった赤の薄い絹のブラウスが，夜風に軽く揺れていた。彼女は舗道の上の自分の足許を見つめた。哀れな，小さい，同情に値する代物だ，と彼は思った。そして，彼はまた勇気を取り戻した。

「じゃ一緒に行こう」と，彼は不機嫌そうに言った。

彼女は彼に体を押しつけ，かまわず腕を絡ませた。「あなたってとてもいい人ね。」彼らは港通りの真ん中に立っていた。頭上のアーク灯が薄紫色の光を放っていた。通り過ぎる人々は，びっくりしたように彼らを見つめた。

「そんなことをするんだったら，もう置いていくよ」と，彼は当惑して言った。

それから，彼らは腕を組んで，明かりや人々が交錯する港通りを歩いていった。彼らは鉄道橋を通り抜け，ソーセージの屋台のそばを通り過ぎた。彼らは一言も口をきかなかった。そして彼らは公園に入った。彼女は彼にぴったり寄り添って，さしあたり安心感を抱いていた。ペーターの足取りは，いささか硬直してぎごちなかった。彼は，自分にある任務が与えられていると感じていた。それをうまく果たせるかどうか，気が気ではなかった。彼の幅広い胸はゆっくりと大きくあえぎ，彼の目は闇をじっと見つめていた。

濠端で彼らはしばらく立ち止まった。黒い水面で，白鳥の羽根が雪のような微光を放っていた。

「あれがパパの白鳥」と，彼女はささやいた。

「どういう意味なの？」

「私の父さんは公園の管理人なの。白鳥やアヒルたちが彼のすべてなのよ。」

「あの管理人は君の父さんなのか？　先のとがった帽子をかぶったあの男が？」

「あなたは，私の年老いた能なしのパパのことを知ってるの？」「今夜彼を見かけたんだ。彼はボートで濠を回っていた。それじゃ，君はあの上の製粉所に住んでいるの？」

「前はね。」彼女はあわてて彼の腕をつかんだ。「来て。あの年よりが今何をしているのか，ちょっと見て行きましょうよ。晩に私はよく彼の部屋をのぞくのよ。彼は今とても孤独なはずよ。でも，彼はなぜあんなに馬鹿な真似をするんでしょう。」彼女は彼を丘の上に引っ張って行った。闇の中で道はよく見えなかったが，彼女は，正確に彼を導いて行った。ベンチから，恋人たちのささやきやいちゃつく声が響いてきたが，その姿ははっきり見えず，闇の中で藪や木々とぼんやり溶け合っていた。

ペーターは，少しつま先立ちする必要があった。そうすれば部屋の中をのぞき込むことができた。しかし，ファニーは，古い木箱をもってきてその上に乗らねばならなかった。管理人は相変わらず新聞を読んでいた。眼鏡をかけているにもかかわらず，彼は，新聞の上に身をかがめねばならなかった。彼の白い髪はもじゃもじゃと首から突き出ていて，頑固な印象を彼に与えていた。ペーターは壁にかかった剥製の鳥に目をとめた。色とりどりの光を放つアヒルと大きく羽根を広げた白鳥が，ソファーの上方にかけてあった。その羽根は，もうすでに少し灰色ですすけていた。

「あの人は鳥たちをきちんと拭いてやらないんです。白鳥が汚らしく見えることったら」と，ファニーは頭を振りながら言った。「死んだ鳥だってまだ世話が必要なのに。」

「あれが母さんよ。」彼女は，老人のすぐ後ろのソファーの上方にかけてある一枚の大きな写真を指さした。太ってがっしりした女性が写っていた。

「死んだの？」と，ペーターは尋ねた。

「ええ，二年前にね。すべては彼女のせいよ。でも，彼女はもう死んでいるし，彼も私には他人同然。」

「ああ，また戻ってくる気はないのかい？　お父さんもその方が嬉しいだろうに…」

「もちろんよ。彼は私に宛てて何通も手紙をくれたわ。でも，私はいやなの。」

「しかし，彼ももう年だろう。よく分からないけど，もし君が…」

「もしあの人が死んでも，それは仕方がないわ。そのときは帰ることになるでしょうけど。時々，帰りたくなることもあるわ。でもね，もううまくいきそうにない，私はもう駄目になってしまったんだって考えちゃうのね。」

「僕だったら戻ると思うよ。まあね…」

「一体あなたに何が分かるの？　何も事情を知らないくせして，私のことにくちばしをいれないでちょうだい。あなたには何の関係もないことよ。もういいから，私の部屋に来てよ。」

彼女は彼の腕を強くつかんで，引っ張っていった。彼らはふたたび無言で公園を通り抜け，濠端を通り，鉄道橋をくぐって港通りに入った。

「なぜあなたは何にも言わないの？」彼女はいきなり彼を不安そうに見つめた。「私のことがもう嫌になったんじゃない？　確かに私は嫌な女よ。でも，上って来て。どうするつもり？」

ペーターはふさぎこんで，狭い急な階段を彼女について上っていった。曇った小さなランプが，しみだらけの淡緑色の壁を照らしていた。階下は食堂で，男たちの笑い声が聞こえていた。

管理人は，まだ新聞の上に深く身をかがめて，それを少しずつランプの真下にずらしていった。ほら，言わんこっちゃない。彼は次の記事を読んでいた。

ねずみに蝕まれるニューヨーク

「ニューヨーク市民はまだ何も知らないが，事態を静観することはもはや不可能になってきている。ニューヨークの公園施設の委員ジョン・ハートは，ねずみ駆除の専門家たちからなる委員会を結成した。ねずみの駆除者たちは会議で自己の経験を開陳したが，その席上，ねずみが跳梁しているのはセントラル・パークや動物園ばかりではないこと，この忌まわしい危険な獣が全市を掘り崩し，安全に気を配る人々には確かに快適でないような場所で巣穴を掘り築いていることが明らかにされた。

ニューヨークでねずみが氾濫していることは，もはや隠し立てできない。公園や施設，湿地ばかりでなく，家や倉庫の中，部屋の中でも，この獣はしばしば群れをなして出現し，敵意をむき出しにして攻撃や破壊を繰り返している。問題なのは，ある種のとりわけ狂暴で大胆なねずみで，明るい毛色のこの種の大型ねずみは，一年ほど前にライカー島で出現したことが報告されている。そこでこのねずみはひとつの村をほぼ完全に破壊し尽くした。

勇気あるねずみ駆除者たち――彼らは英雄には事欠かぬこの町で目下のところ英雄になっている――は，すでにねずみたちとの緒戦を経験した。この前哨戦はけりがついている。ねずみたちのためにある職員は指を二本なくした。その職員は，公園の小道で数匹のねずみを叩き殺そうとしたのだが，逃げ場を失ったこの獣たちは逆襲してきた。管理人が一撃を加えるか加えないかのうちに，ほぼ一ダースのねずみたちが彼に殺到し，彼の体をはい上がり，食らいついた。放水による反撃で，この職員は，いやなかん高い叫び声をあげる血に飢えた獣たちのさらなる攻撃からようやく救い出されたのである。ニューヨークで何匹のねずみが跳梁しているのか，その数を見積もることは誰にもできない。ある人は五〇万だと言うし，またある人は二〇〇万とも言っている。いずれにせよ，危険は大きい。ニューヨーク市は，ひそかに根気強くねずみとの戦いを開始した。光を恐れるこのならず者を暗い地下の通路に封じ込めることは果たして可能なのだろうか？　とにかく厄介な問題だ。

ニューヨークの目下の頭痛の種がこれだ。かつて平穏で秩序ある生活を切望する市民たちをおびやかしていたのはギャングであり，続いて禁酒法のエージェント，経済危機だったが，今や，この都市はねずみに噛りかけられているのである…」

公園の管理人が握りこぶしでテーブルを叩いたので，ランプが少し揺れた。彼は取り乱して剥製の鳥たちのかかった壁を見渡した。あの獣がこんな状況をもたらすなんて！確かに予感はあった。今やつらは濠端を小さな群れをなして駆けずり回っている。だが，やつらの数は急激に増える。やつらはますます増え続け，町中や家の中に押し寄せてくるだろう。だから自分は市当局に警告したのだ。落ち着き払った微笑みが，いつか，お偉方の顔から消えるだろう。彼らは指を二本あいつに，あの吸血鬼に噛み切られるだろう。彼は自分自身の手を見た。親指と人差し指の間，そばかすや灰色の毛の真ん中に，二つの小さな赤い条痕が残っており，腕はまだ腫れ上がっていた。あの不埒な厚かましい獣，あいつのおかげだ。やつらは，彼のお気に入りの鳥たちを狙っていた。彼はやつらの興をそごうとした。彼はそっとアヒルの巣のそばにボートを漕ぎ寄せ，暖かくて居心地がよい巣箱の中を用心深くのぞき込んだ。首のところが緑色に光るリリーが，悲しげに隅の方にうずくまり，あの化け物にしゃぶられる卵を黒く光る目でじっと見つめていた…。彼がすばやく手を突っ込んでやつを追い払おうとしたとき，やつは叫び声をあげながら彼の手に飛び

かかり，噛みつき，もがき，彼が手を引き抜いたときも食いついて離れなかった。彼はオールを取ると，それでやつの頭を叩いた。するとねずみは死んでボチャンと水に落ちた。

彼は立ち上がり，幅の広い曲がった背中を揺すりながら飾り戸棚のところへ行って，便箋を取り出した。そして，インキ壺とペン軸を取り出すと，へたくそな筆使いで読みづらい大きな文字をゆっくり書いていった。

「市当局殿…拝啓，今一度書面にて，小生の提案をお聞き届けいただくことを切望いたします。ただいま，次のような内容の新聞記事を読みました。ご参考までに，その記事を同封いたします。なにとぞ，事態を軽視なさらぬようお願いいたします…」

ベッドは二段になっていて，アントーンは下のベッドに腰かけていた。彼の向かいに小さなテーブルが置いてあり，そのうしろにソファーがあった。そこにオスカルがすわっていた。彼らは押し黙って両腕を組み，休息していた。テーブルの上には小さなランプが置かれていて，本やノートを照らしていた。船旅の間も，オスカルは仕事をするつもりでいた。

「旅行中に仕事をするなんてもったいない」と，アントーンが言った。「僕だったらずっと甲板にいるがね。」

「きっちり時間を配分しておけばうまくいくさ。もちろん，僕だって日に何時間かは外に出ていたい。でも，仕事もしたいんだ。じゃあ，もうそろそろ手を洗って食堂に行くとするか。そこの呼び鈴を押してくれ。」

「なぜ僕が？」と，アントーンは聞いたが，立ち上がるとドアのかたわらの呼び鈴を押した。その下には「給仕」と書かれていた。しばらくすると誰かがドアをノックした。

「どうぞ」と，オスカルが叫んだ。

給仕がそっとすばやく入室し，二人に向かって深々とお辞儀をした。「今晩は，お客様。私が給仕です。お客様たちのお世話をいたします。何なりとお申しつけください。」その給仕は華奢な体格で髪はカールした金髪，あばたのある赤ら顔をしており，彼の青い目は好意的で少し不安そうに見えた。彼の鼻はいささか上向きに反っていた。彼は白いリネンの上着と黒いズボンを身につけていた。

オスカルは「水をお願いします」と言ったが，アントーンはびっくりして給仕の柔和なあばた面を見つめていた。

「かしこまりました。」 給仕は姿を消した。

「誰だか分かったかい？」

「何のことだい？」オスカルはまた，本のページをぱらぱらめくり始めていた。

「あれはバウアーだよ。」

「バウアー？　誰だい？」

「あの給仕はバウアー。フリッツ・バウアー。マールブルクのゼミナールの。もう忘れたのかい？　何年か前，彼はいつも歴史のゼミナールに出席してた。あの給仕は彼にすごくよく似てるよ。」

「そんな馬鹿な。」

「彼に尋ねてみよう。」

「ここの人とはかかわり合いになるなよ。」

ノックする音がして，給仕がまた水差しを二つもって入ってきた。アントーンは彼の控え目な動作を観察していた。アントーンは立ち上がると，彼に近づいた。彼の丸い実直そうな顔は親しげに微笑み，ちょっとはにかんでいた。アントーンはためらったが，尋ねてみた。「すみませんが，あなたとは知り合いのような気がするんです。でも，そうじゃないかも知れない。あなたは以前マールブルクの大学で学んでいたフリッツ・バウアーさんじゃないですか？　だとすれば奇遇ですね。」

給仕は真っ赤になって驚き当惑しながら微笑んだ。「その通りです。私はバウアーです。でも，どうしてあなたは私のことを…。私は思い出せませんが…。たくさんの人にお会いしたものですから…」

「本当にバウアーさんですね？　こいつはすてきだ。私にはすぐ分かりましたよ。だから今言ったでしょう。「マールブルクのバウアーさんですか？」って。」

オスカルはうなずいた。彼は相変わらずソファーに腰をおろしていた。彼はきまりが悪かった。そして，儀礼的に，冷ややかに微笑んだ。「奇遇ですね…」

アントーンは，バウアーの手を握って揺すった。「まだ思い出せませんか？　僕たちはマールブルクの歴史のゼミナールで席を同じくしてたじゃないですか。」彼は自分とオスカルの名前をあげた。

「まさかそんなことが」と，バウアーは言った。彼の青い目は虚空を見つめていた。彼は相変わらず謙虚な態度で，手をズボンに当てて立っていた。「マールブルクで？　ちょっと待ってください。マールブルクでねぇ。それはずっと前のことですよ。すみません，今はもう正確には思い出せないんです。あれから色々なことがありましたからね。マールブルクですか。あれ以来行ったことはありません。大学は今もまだあそこにあって，ゼミナールも続いているんですね。あなた方もまだあの大学におられるんですか？　いや，失礼しました，ちょっと聞いてみたかっただけです…」

「ええ，まだあの大学にいます」と，アントーンは答えた。「でも，もうじき卒業です。ありがたいことに，もうあと二ゼメスターを残すだけです。今，僕たちはオランダへ調査旅行に行く途中なんです。あるいはむしろ，僕の友人が調査旅行の途中で，僕はただ面白半分でついて来ている

だけかも知れません。彼はカルヴァンのことを研究していて，それでオランダのアムステルダムに行かなければならないんです。重要な文書があるってわけです。ね，これで事情は飲み込めたでしょう。でも，こんなこと，今のあなたはまったく詰まらぬことだとお笑いになるでしょうね。本当に馬鹿らしく思われるんじゃないですか？」

「笑うなんて，とんでもありません」と，バウアーは落ち着いて控え目に答えた。「私は自分で勝手にドロップアウトしただけなんです。そのことでもう私はお客様たちを煩わせたくありません。ところで，お食事の用意が出来ております。船長もお待ち申し上げておりますので，お出でください。」彼は一瞬，アントーンを親しげに見つめた。その大きな口のまわりには微笑みが浮かび，あばた面の頬にはえくぼが出来ていた。顔の真ん中の反り返った鼻は少し滑稽だった。道化師みたいだなと，アントーンは思った。それから給仕は，アントーンよりもむしろオスカルに向かって深々とお辞儀をして，布製の白い靴音を忍ばせ無言で姿を消した。

アントーンは水をボールに注ぎ，手を洗った。オスカルもそうした。「マールブルクのバウアーか。信じられないな。ここはアデライーデ号の船上だぞ。」アントーンは大きな丸い頭を揺すった。「君はどう思う？　さっきから何も言わないけど。」

「何だか具合が悪いね。正直言って。」

「何だって？　具合が悪い？　どうしてだい？　僕たちがやつにまた会えたなんておもしろいじゃないか。彼は気の毒だと思うよ。いきさつはよく分からないけどね。」

「あまり親しくしないことだ。彼は給仕なんだよ。この船上では僕たちが知り合いだってことを気取られないほうがいい。」

「つまらないことを言うなよ。」

「タオルもないのか。」オスカルは非難を込めて自分のびしょ濡れの両手を高々とかかげて見せた。彼は呼び鈴を押した。

ドアをノックする音がして，給仕がそっと入ってきた。

「タオルがないんだけど」オスカルが言った。彼は落ち着き払ってバウアーを見とがめていた。オスカルもお固いことだ，とアントーンは思った。

「すみません。すぐお持ちいたします。」バウアーの青い目は，恐縮と後ろめたさをあらわしていた。彼は姿を消し，すぐに二枚のタオルを腕にかけて戻ってきた。オスカルとアントーンが手を拭いている間，彼は小声で言った。「食事を摂りに来て頂けませんでしょうか？　船長もテーブルについておりますので。」

「分かりました。それじゃ案内してください」と，オスカルが言った。

バウアーはドアを開けて彼らを先に行かせ，ふたたび彼らの前で軽くお辞儀をした。あんなに恭しくする必要はないのに，とアントーンは思った。彼はバウアーに気兼ねしていた。

彼らは船内の廊下を通り抜け，船室や白衣のコックが立ち働いている厨房のそばを通り過ぎた。彼らは機関室をのぞき，積み荷を船内に運び込むクレーンのガラガラいう音を聞いた。船は真っ黒で，暗い夜に黒い水面に浮かんでいた。船室から洩れた明かりが埠頭や水面に落ちていた。港は今とても静かだった。時折，潮が岸壁に当たって音をたてた。アデライーデ号の人々だけが活動していて，彼らの叫び声が夜のしじまに響いていた。エーリヒとハンスは，船をじっと見つめていた。彼らは船室や貨物室をのぞき込み，部屋の中のオスカルとアントーンを観察し，白い上着をつけた給仕がタオルを二枚腕にかけて部屋に入るのを目撃した。ブリッジにいる船長の姿も見えたし，彼の粗野な大声も聞こえた。あの男は一体何を毒づき，何をののしっているのだろう？　今はもう彼の姿は見えない。彼は食堂ですわって，オスカルやアントーンとともに夕食をとろうとしていた。彼のごつごつした毛深い手がテーブルの上に置かれ，ナイフとフォークを落ち着きなく動かしていた。忌々しい乗客たちめ！　ロッテルダムで早く下船すればいいんだ。

エーリヒとハンスは巻き上げられたともづなの上に腰をおろしていた。彼らは長いこと口をきかなかった。辺りがきれいにたそがれてきた。空は重苦しく不透明で，月は出ていなかった。夜が彼らのまわりで圧縮されていた。アデライーデ号の上も今は静かになっていた。丸く太い船腹が無言で横たわり，暗闇にそっと溶け込んでいった。少年たちは低い倉庫の材木のすえたような臭いをかいだ。太陽が日中その上に照りつけ，倉庫は熱を一杯に吸い込んで，今，その暖かい吐息を放散させていた。一匹の猫が，かすかに鳴きながら大仰に体を起こして倉庫のまわりをめぐっていた。

エーリヒはびくびくしながら言った。「もう家に帰った方がいいよ。」

ハンスは高慢げに海中を見つめていた。しばらくして，彼は短くあざけるように言った。「ルイーゼはもうとっくに眠ってるだろう。退屈したんじゃない？」

「ああ，彼女はもう寝てるよ。何時頃かな？　きっともうずいぶん遅いよ。」

「でも，ルイーゼは本当にいい娘だね？」と，ハンスは尋ねた。

「僕もそう思う。」

「彼女は生まれながらの女の子だ。」

「その通り。」

「たとえば，彼女はフィフィよりもずっと親切だ。」

「ああ，フィフィはくだらない。時々馬鹿みたいに笑うね。」

「でもルイーゼはそうじゃない。」

「そうだ，ルイーゼは違う。彼女はすてきだ。」

ハンスはあくびをした。「さあ，これからゆっくり家に向かって折り返すとしようよ。君は眠たいんだろう。」

彼らは，港をぶらついた。エーリヒは自分の足取りを制御せねばならなかった。できれば，彼は矢のように速く家に走って帰りたかったのだが，そうもいかないことは分かっていた。投げやりになった彼は，ハンスとならんで悠然とぶらついていた。アストリア館の前でハンスはもう一度立ち止まった。「入ってみたいなあ。」フロアから音楽と叫び声が響いてきた。門番が彼らに歩み寄ってきた。「ここはお前さんたちの来るとこじゃない。早く帰って寝な。」ハンスは後ろを振り返った。誰もいなかった。「誰のことを言ってるのかな？」

「カルヴァンですか？」と，船長はたずねた。彼は興味を示そうとした。彼は馬鹿丁寧にオスカルの方を見やった。彼の狭い下品な額には，緊張からくる皺が何本か見えた。「彼はオランダに住んでいたことがあるんですか？　この人のことはあまりよく知らないのですが。」

「いいえ，彼はスイス人です」と，オスカルが偉そうに説明した。「でも，オランダの新教がカルヴァン派だったことはご存知でしょう？」

「初耳です。新教なんですか？　こりゃおもしろい。なるほど，それであなたはその新教を現地で…」

「いえ，実は新教のことじゃないんです。僕は，カルヴァン主義と経済倫理の関係を知りたいんです…」

「すみません。そりゃ何です？　世の中には色々なものがあるんですね。」マルテンス船長は，後ろにもたれかかって作り笑いをした。彼の太い赤みがかった毛深い手はテーブルの上に置かれ，ナイフとフォークを上向きに立てていた。この自惚れた気取り屋の馬鹿話ときたら，まったくひどい。一体これはどういうことなんだ？　なぜ船会社はこのおれにいつもこんな苦労をかけるんだろう？　船客と同席するのは，これが最後だ…

「ええ，一六世紀と一七世紀のオランダ人のカルヴァン主義と経済倫理の関係，それはつまり…」

アントーンはもう我慢ができなかった。彼は言った。「マルテンス船長はそんなことに関心をおもちじゃないよ。くだらないことで船長を苦しめるなよ。」無言でテーブルのそばに立ったり，あちこち駆け回って料理や皿を運んでいるバウアーには，この会話はやりきれなかった。彼はやっとの思いで微笑み，やさしい少女のような青い目で時々不安げに船長の方を見た。彼のあばた面は少し赤くなった。船長もまた，食事の間，うかがうような妙な目つきで時折バウアーの方を胡散臭そうにじろじろ見ていた。

その時，船長のそばのソファーにすわっていた犬が突然，前足を主人の大きな膝の上にのせた。肥えたいやらしい犬で，黒いぶちがいくつかある小さないやな目をした毛の短い白いテリヤだった。犬はかすかにうなり声をあげると，まず船長の皿の上の赤くて柔らかい肉料理を，次いで船長の青く血管が浮き出た赤ら顔をのぞき込んだ。

「おや，お前も何か欲しいのか？　ネリーはおなかがすいてるのかな？」

ネリーは大声で吠えると，媚びるように頭を上げた。

「また忘れたな」と，船長は言って，バウアーを脅すように見つめた。「これは一体どういうことなんだ？」彼は太った犬の体を何度もピシャピシャ叩いた。「こんな獣は世話してやる必要はないとでも思っているのか？　この犬はお客様たちのもので，お前以上の存在なんだぞ。この無作法者，分かったか？」

バウアーは体の緊張が解け，がっくりした。彼はうつむいて目をそらせた。「分かりました，船長」と，彼は小声で言った。

「すぐに深皿に一杯餌を入れてもってきてやるんだ。一体なんてざまだ？」マルテンス船長は立ち上がった。彼はバウアーに近寄ると，長い間，頭のてっぺんから爪先までじろじろ見ていた。「気をつけ。」バウアーは姿勢を正した。「注目！」バウアーは彼を従順な目つきで見つめた。彼らはたがいに無言のまましばらく見つめ合った。マルテンス船長があえいだ。「さあ，深皿をもってくるんだ」と，彼は言って，ふたたび腰を下ろした。バウアーはそっと船室を抜け出した。

「名前はネリーですか。それじゃ雌ですね？」オスカルは話題を変えようとして言った。

「はずれです。雄ですよ。ハハハ。」マルテンス船長は笑った。雌ではないことを示すために，彼は犬の前足を高く上げた。「理由ははっきりしないのですが，前からネリーと呼ばれているんです。生粋の雄です。それともお前さんはオカマなのかな，このちびすけ？」彼はまた犬の頭を撫で，やさしく抱きしめた。犬は満足して，息をはずませて鳴いた。

アントーンは言った。「この給仕のバウアーを，私たちはずっと前から知っているんですよ。」

船長が言った。「本当ですか？」 オスカルはアントーンをとがめるように見つめた。黙ってればいいものを。

アントーンが言った。「彼は以前，マールブルクの大学にいたんです。前はもっといい暮しをしていたのに，気の毒なものです…」

「こいつには厳しくしなきゃならないんです。まったくだらけ切ってるから。でも，今，大目玉を食らわせたので，もうちゃんと言いつけを守るでしょう。彼が以前ちょっと違う世界にいたことは知ってます。それももう過去のことです。私は彼からすべてを聞き出しました。彼は私に物語らざるをえなかったんです。私は言ってやりました。バウアー，どうしてこうなったのか，隠し立てせずにさっさと言うんだ――するとやつは，否が応でも話さなければならなくなったんです。ご存知のように，やつは無気力で女の子のようにやさしい。やつは以前安キャバレーにいたこともあるんですよ。そこでリートを歌っていたんです。まったく滑稽なリートをね。ご存知でしたか？」

アントーンは言った。「いいえ。気の毒なかぎりです。」

「気の毒ですって。なぜです？　やつは運がよかったんです。他にどうしようもないでしょう。あなたはとんだ思い違いをなさってる。」

バウアーが深皿と犬の餌をもってふたたび入ってきた。彼は，深皿を床に置くと，「ネリー」と呼んだ。マルテンス船長は，ネリーをやさしくソファーから押し出した。「さあ，お食べ。」ネリーは絨緞の上に立つと，しばらく興奮してバウアーにひどく吠えかけていたが，うなりながら餌を食べはじめた。

「おい，リートを一曲歌って聞かせろよ。お客様たちもご所望だぞ。」

「だめですよ。」バウアーは大いに仰天し，少し後ずさりした。「今はだめです。」

「今すぐにだ。遠慮するなよ。お前ができるってところをお見せしろ。」

「船長，今はだめです。後生ですから。」バウアーは両手をよじり，哀願するような目で彼を見つめた。

「命じられたとおり，まあ歌ってみろよ。アコーデオンを持ってこい。」

「船長，後生ですから。お客様たちの前ではできません。お客様は私のことをご存知なんです。私は以前，あの方たちと…。どうか，私を物笑いの種にしないでください。」

「早くしないか…。さあ，始めるんだ。アコーデオンを持ってこい。おれが伴奏してやるよ。お前は歌い踊るんだ。お客様，びっくり仰天なさいますよ。」

「バウアーさんにその気がなければ，私たちは構いませんよ。彼がやりたくないってことはお分かりでしょう」と，アントーンは言った。オスカルは当惑して皿を見つめていた。

「バウアーさんがやりたくないですって。これは驚いた！自分がやりたいかやりたくないか，バウアーさんはまだ聞かれてもいないのに。さっさと取りにいくんだ！」

バウアーはアコーデオンを持ってきて，小声で言った。

「船長，あなたは弾けないんでしょう。」

船長は笑った。「弾けるとも。まず何を歌ってもらおうか？　「ビルバオの野生のアニー」ってのはどうだ。さあ，始めよう。学者さんたち，よくお聞きなさいよ！」

彼は弾き始めた。

バウアーはアントーンの方を見つめた。彼の眼差しは優しく悲しげで，苦しげだが官能的だった。彼は両手を腰に当て，拍子に合わせて腰を揺すり始めた。そのとき彼は，もう一度アントーンとオスカルの方を見た。

「だめです」と，彼は叫んだ。「これは下品すぎます。私にはとても歌えません。無理です。」そして彼は走り去った。

マルテンス船長は無言でわびしくすわっていた。彼はアコーデオンを脇へやった。ネリーは，皿の餌をムシャムシャなめるように食べていた。

オスカルは立ち上がった。「すみません。もう失礼したいのですが。」

アントーンは尋ねた。「船はいつ出るんですか？」

マルテンス船長は親しげな顔つきをしようと努めていた。「十二時です。ですから，あと二時間半ほどあります。」

「何ができますかね？　もう一度港を見物することはできるでしょう？」

「できますとも。臨港地区にお出かけなさい。晩はとてもおもしろいですよ。あそこには，たとえばアストリア館がありますし。」「ええ，それじゃ出かけましょう。」

外の廊下に出たとき，オスカルが言った。「ひどいもんだ，まったく。」

彼らはもうしばらく散歩していたかった。彼らがいつまた町に出かけるのかは，誰にも分からない。彼らは船室に入って，コートと帽子を身につけた。オスカルはもう桟橋に向かっていたが，アントーンはまだ手洗いに行かなければならなかった。ショックが彼の食欲を失わせていた。廊下を通って外へ出ようとしたとき，彼は厨房のそばを通り過ぎた。白くて明るい小さな部屋の中で，給仕が頭をかかえてすわっていた。彼の肩はぴくぴく震えていた。アントーンは部屋の中に入った。

「あまり気にしないでください，バウアーさん。」

バウアーは目を上げた。涙が静かに彼の青い少女のような目から流れ出て，あばた面の頬を伝って流れていた。「彼の扱いはひどすぎます。あなた方の前で私の面目は丸つぶれです！」

「どうして彼はあんな扱いをするんです？」

「私を苦しめたいんです。私を苦しめるのが面白いんですよ。いつも彼は私を追いかけてばかりいます。彼は私を駄目にしてしまったんです。」

「でも，一体なぜなんです？」

バウアーは当惑しながら，悲しげに微笑んだ。「ええ，奇妙なやり方でね。お分かりでしょう。いつも一人で海上をあちこち移動して，女性を連れていけないので，きっと頭がおかしくなったんですよ。」

「そういうものですかね。」アントーンは元気なくつぶやいた。

「彼は私を苦しめたいに相違ありません。それが彼には楽しいのです。それが彼を粗暴にしているのです。まあ一度ご覧になれば分かりますが…」

「ええ，でもあなたはなぜそれをすべて甘受しているんです？　出ていけばいいじゃないですか。」

「出ていきたいのはやまやまです。しかし，他の勤め口を見つけるのは容易なことじゃありません。それに…つい臆病になってしまって，どうにも決心がつかないんです。それで長居をしているわけです。」

「バウアーさん，いずれにしても出ていきなさい。そんな勤め口ならむしろない方がましです。」

「ええ，あなたのおっしゃる通りです。出ていくべきでしょう。でも，結局は元の木阿弥になるんです。」バウアーは途方に暮れ，脇を見た。

「それはあなた次第ですよ，バウアーさん。」アントーンは叫んだ。

「もちろんです」と，バウアーは言った。彼は疲れた青い目をドアの開口部に向けた。犬のネリーが突然，敷居の上に立った。

バウアーは叫んだ。「ご覧なさい。ああやって私のあとについて嗅ぎ回っているのです。この獣の中に隠れているのは，彼の嫌らしい卑しい魂なんです。」

目をぎらつかせたネリーは，かすかにうなりながらゆっくりバウアーの方に歩み寄った。犬の汚い背中の毛は逆立っていた。

「あっちへ行け，この下司野郎」と，バウアーは叫んだ。

ネリーの吠える声は次第に大きく強くなってきた。

「今にやつはまた消え失せますよ」バウアーは悲しげな目でアントーンを見て叫んだ。「食らいつこうとでもするように，やつはいつも私に飛びかかるんです。出て行け，この悪魔め…おまけにこいつは嫉妬深いときてる。私のことはほっておいてくれ。」だが，ネリーはお構いなしにその小さな丸く固い体をバウアーにだんだん強く押しつけ，顔にかみつこうとして服を引っ張った。バウアーは，手と脚で犬を突きのけ，テーブルの方によろめき戻って，その縁を背にもたれかかった。そのとき，彼の手がテーブルの上に置いてあった肉切りに触れた。ネリーはふたたび彼に飛びかかり，今度はズボンばかりか太腿にかみついた。じたばたしてしきりにうなりながら，犬は彼の大腿にぶら下がった。苦痛のあまりバウアーは短く叫んだ。彼のあばた面は，ブロンドの柔らかい巻き毛の裾のところまで真っ赤になった。突然，彼は肉切りに手を伸ばして，それをすさまじい勢いで犬の額にぶつけた。ネリーは床に音を立てて倒れ，急に身動きしなくなった。

「こいつはまずい。」バウアーは肉切りを捨てた。

ネリーは，身動きせずに両足を大きく開いて横たわり，白目をむき出していた。

「こいつは死んでしまったようだ」と，アントーンは言った。

バウアーは微笑んだが，取り乱していた。彼の頬にかわいらしいえくぼが出来ていた。

コックが戸口にあらわれた。彼は白衣を身につけ，白い頭巾をかぶっていた。頭巾をかぶったままドアを通り抜けるために，彼は少し身をかがめねばならなかった。バウアーはあっけにとられて彼を見つめた。

「馬鹿みたいにこっちを見るなよ」と，そのコックは言った。「おや，こんばんは，お客様。あなたは確か二人連れでいらっしゃいましたね。」

「ええ」と，アントーンは言って犬の方を見た。

「この厚かましい犬をご覧なさい。厨房の真ん中で横たわるなんて。」彼は犬を踏みつけた。

「やつは眠ってるんです」と，バウアーは言って急いで犬を腕に抱いた。ネリーの頭はだらりと垂れ下がり，ぶらぶら揺れていた。足は硬直していた。「かごに戻してきます。」

「そうしてくれると助かるよ」と，コックは頭を左右に振りながら言った。

バウアーは犬とともに姿を消した。アントーンは彼のあとを追った。

バウアーは手すりにもたれかかって，犬の死骸を水中に捨てた。それはボチャンと音を立てて落ちた。

「私は一体どうすればいいんでしょう？　彼がこのことを知ったら，私を殴り殺すに違いありません。」

「彼が気づく前に，逃げ出すことですよ」と，アントーンは言った。

「そうせざるを得ないでしょう」と，バウアーはもう冷静になって言った。「あなたは何もおっしゃらないでしょうね？」

「何も言いませんよ」と，アントーンは言った。「感謝します」と，バウアーは言った。「申し訳ありません。」彼は，布靴の足音を忍ばせてそっと暗い廊下に出ていった。夜は静かで闇が濃く，アントーンは，たった今犬の死骸が落ちた海面をのぞき込んだが，何一つ見分けられなかった。おそらくもう沈んでしまったのだろう。あの肥えた獣は，今ごろはさらに水をいっぱい吸い込んでいることだろう。